

巻頭言 Foreword

すべては我々の選択にかかっている

— It All Depends on Our Own Choice —

国際融合文化学会会長・日本大学大学院教授

上田 邦義

President of ISHCC & Professor of Graduate School, Nihon University

UEDA Kuniyoshi

The age of comparisons and competitions should be over, and we are creating a really global community on the earth, respecting all peoples and all cultures of the world.

日本で最初の、パソコンによる通信制大学院として、日本大学に「総合社会情報研究科」が設置されたのは1999年4月であった。その一年後の2000年3月、数ヶ月ぶりに全国各地から静岡県沼津市のK K Rホテル「はまゆう」に文化情報専攻一期生の中8名が参集した。それは仲間の竹内正人君の「北日本文学賞」懸賞小説第二席入選を祝うためであった。そして翌日は近くの旧沼津御用邸の学問所で研究会を開くためであった。

しかし、初日の祝賀会の直後からすでに話は盛り上がっていた。もはや優劣の連想を伴う「比較」の時代は終わった。これからは比較や競争ではなく、「協調・共生」でなければならない。すべての文化、すべての民族、すべての個人を尊重し、その「調和」と「融合」を図ることがまず前提とされなければならない、と。

こうして発足したのが「国際融合文化学会」である。「調和と融合・文化文学会」や「融合文化・文学会」等の名称も挙がったが、「国際融合文化学会」に落ち着いた。そして英語名は、“**International Society for Harmony and Combination of Cultures**” (ISHCC)となった。

当初は名称に「国際」がなかった。それがついたのは、瀬在幸安総長に名誉会長就任のお願いに上がったときに、総長が学会の趣旨に直ちに共鳴され、「国際」をつけるよう助言して下さったからである。この会が国際的な大きな学会として発展し、世界の平和に寄与することを期待してであることは言うまでもない。

思えば20世紀は、科学技術と戦争と経済の時代であった。しかし21世紀を迎えてようやく世界的に「共生」の気運が高まっていた。だが、忘れもしない2001年9月11日、アメリカでの同時多発テロ事件、さらにそれに対するアメリカ政府の「報復戦争」は、この機運を一気に打ち砕いてしまった。そしてアメリカでは、John Lennon の *Imagine* (『イマジン』すべての人が幸せに暮らせる世界を想像してみたまえ) など、平和を訴える歌は放送自粛になった。アメリカを自由と民主主義の国と考えていた人々には信じがたいことであった。

しかしアメリカ国民がみなこの「戦争」を肯定していたわけではない。それから半年後の2002年5月、日本大学は第42代アメリカ合衆国大統領 William Jefferson Clinton 氏に名誉法学博士の学位を贈呈したが、市谷の日本大学大講堂で行われた贈呈式後の記念講演で、クリントン氏は、“no military solution”「軍事による解決はありえない」と述べたのである。そして「真の地球共同体」“truly global community”，「真の地球経済」“truly global economy”を提唱し、「共生」を訴えたのである。

今われわれのなすべきことは、「禍を転じて福となす」“Turn a disaster into a blessing”である。すべてはわれわれ自身の選択にかかっている。われわれの研究と実践が未来志向のものであり、人類全体の精神的進化に貢献するものであることを願っている。